

招く骸骨

野村胡堂

一

「親分、笑っちゃいけませんよ」

「嫌な野郎だな、俺の面を見てニヤニヤしながら、いきなり笑っちゃいけねえ——とはどういうわけだ」

銭形平次とガラツ八の八五郎は、しばらく御用の合間を、こつち暢気な心持で、間抜けな掛合いぼなしの癖ぼなしのような事を言っているのが、何よりの骨休めだったのです。

「親分にお願いしてくれ——って言うんだが、化物退治じゃねえ」

「化物退治は洒落しゃれているね。場所はどこだい」

「金沢町の升屋なんで」

「両替屋の升屋かい」

「そうですよ。——升屋のお内儀が、銭形の親分さんの御機嫌の宜い時、そつとお願いして見てくれ。詳しい事は、いずれお目に掛ってお話するけれど——って」

「馬鹿だなア。岡っ引に化物退治を頼む奴があるものか。——そんな口なら、岩見重太郎の方へ持って行くが宜い」

銭形平次は、こんな事を言うのです。

「その岩見重太郎ってえのは、どこの岡っ引で？」

「ハツハツハツハツ、こいつは秀逸しゅういつだ。岩見重太郎が驚くぜ、岡っ引と間違えられちゃ」

「だって、あつしはまだ、岩見重太郎なんて野郎に逢ったこともありませんよ」

「そうだろうとも、俺も逢ったような気はしねえ」

「へッ、呆れたもんだ」

どこまで行っても話は軌道レールに乗りません。

「だがね八。升屋には一体どんな化物が出るんだ」

平次はようやく真面目になります。化物退治も暇なときには満

更でないと思つたのでしよう。

「化物だか幽霊だか知りませんが、升屋では三月ほど前から変なものが出て、奉公人が居つかなくて困るそうですよ。主人の由兵衛も心配はしているが、商人に似合わぬしつかり者で、こんな事が世間へ知れちゃ、商売にも障るだろうし、神田草分けと言われ
る升屋の暖簾のれんにも関わるから、なるべく人に聞かせたくねえ——
とこう言うんだそうで」

「成程。升屋の主人の言いそうな事だ」

「——多分狸か狐の悪戯わるさだろう。捕つかめえた者には褒美をやるとうんだそうで」

「フーム」

「ところが、その化物は、おそろしく人見知りをして、主人夫婦と一番番頭の金蔵が寝泊りをしている、奥の離室へは出るが、多勢の奉公人のいる、店の方へはけぶり気振も見せないんだそうですよ」

「贅沢な化物じゃないか」

「主人の由兵衛はあの氣象だから、お内儀が閉口して、店の方へ行つて休もうと言つても、どうしてもきかねえ。——子供だましの化物騒ぎに脅おどかされて、七年間も寝起きをした離室を明け渡すのは、町人の恥だてんで——」

「町人の恥は嬉しいな」

平次はまだ少し茶化しながら、それでも次第にこの話に引入られる様子です。

「一体、この世の中に、化物や幽霊はあるものでしょうか、ないものでしょうか、親分」

「俺は化物や幽霊に付き合いはねえ。そんな事は横町の手習師匠にでも聞くが宜い」

「でも、出るのは確かですよ。お内儀は何べんも見たって言うんだから」

「出るだろうよ。俺はそのエテ物に、足が二本あるか、四本あるか、知りたい」

「じゃ、升屋へ乗込みましょう。主人もお内儀も喜びますよ」

「止そうよ。化物退治は気が乗らねえ。が、主人かお内儀に逢つたら、これだけの事を言っておくが宜い。——エテ物は離室を明けさせたい様子だから、一晚店へ引揚げて、様子を見るが宜かろう、——用心が悪いと思うなら、あまり物を怖こわがらない番頭を一人泊めるように——と」

「そう言つて来ましょう」

ガラツ八の八五郎は、そのまま飛出しました。この馬鹿馬鹿しい化物騒ぎが、平次が今まで経験したことの無いほど、不気味な恐ろしい事件の発端になろうとはもとより知る由もありません。

翌る日、升屋の主人由兵衛は、お内儀のお蔭つたといっしよに、銭形平次の小さい家を訪ねて来ました。

「折入って親分にお問い合わせすることがあつて、もつたいないが、明神様へ朝詣りということにして参りましたよ」

由兵衛は苦笑します。年輩三十五六、デツプリ脂あぶらの乗つた、柔らかな顔立ちも、穏やかなうちに品のある物言いも、神田の草分け、江戸両替番組世話役の貫禄に申分ありません。

「これは、升屋の旦那。化物が暴れ出しましたか」

平次は何か予期している様子です。

「それなんですよ、親分。私はもう怖くて怖くて、あんな家に住む気がしません」

お内儀のお蔭はつつしみを忘れて、夫の後ろから口を添えました。二十そこそこでしようが、昔左褌ひだりづまを取ったことがあるとかで、

抜群の年増ぶりです。少し青白い面長、商売人上りらしい活々した大きい眼、歌舞伎役者のような表情的な身のこなしなど、妙に病的な魅力を感じさせる種類の女でした。

「始めから順序を立てて仰しゃって下さい」

銭形平次はにこやかにそれを受けました。神経の尖り切った女には、こうするより外に術てはありません。

筋を進める前に、少しばかり、その頃の両替制度と、升屋の資格を説明すると宜いのですが、話が固くなりますから、これはほんの概略がいりやくに止めておきます。

その頃、江戸の両替屋は六百軒と限られ、三十幾組に分れて、江戸の金融機関きんゆうになっていたので、その組織は非常に複雑を極めます。大別すると本両替ほんと銭両替ぜにとあり、資力の大きく、家格の良いのは、大名や商人の金融、金銀為替かわせなどを扱い、上納金の検査や、金銀相場立て、新旧貨幣の交換引揚げ、単純な両替すな

わち貨幣の交換まで、いろいろと仕事があつたわけです。

升屋は番組両替の世話役で、代々金沢町に住み、三井や竹原、中井、村田の本両替屋に次ぐ家格。すなわち金銀を店名の包封ほうふうのまま通用させる、江戸九軒の大両替屋の一軒だったので。

先代は徳五郎と言いましたが、七年前、川崎へ行ったまま行方不明になり、持物は品川の海へ浮んでいたので、網船でも出して溺おぼれたのだろう、ということになりました。

内儀のお蔭は一年孤閨こけいを守った上、親類方の相談で、支配人をしていた、主人あるじの義理の甥由兵衛に嫁合めあわせ、升屋の身上は、小搖ぎもなく立って行きました。その間に、子飼いの番頭の与市が、

お蔭に気があって大騒動をしたり、それからぐれはじめて、さんざん道楽をした揚句、贖金を使って遠島になりましたが、事件が店の外で起つたのと、升屋の顔がよかつた上、相当以上の金を使ったので、店には何の疵きずもつかず、簡単なお叱りだけで事済みになつたことがあります。それももう六年前の出来事で、銭形平次も、徳五郎の失踪と与市の処刑おほろげを臆おぼろ気に記憶しているだけの事でした。

「この化物騒ぎは三月ばかり前からですが、どうにもこうにも、お話になりません。屋根の上へ石が降つたり、女共せつちんが雪隠へ行くと、箒で顔を撫で廻したり、髪の毛がサラサラと障子に触つたり

——、毎晩怪談噺の仕掛けのような事が起るのです。あんまり馬鹿馬鹿しいから気にも留めずにおりますが、家内が気に病んで、とうとう親分のお耳に入れたそうで——」

「——」
平次のまじめな顔を、少し極り悪そうに見ながら、由兵衛はつづけました。

「ゆうべは親分の言いつけなすった通り、私共夫婦だけ母屋おもやへ寝て、離室の方を番頭の金蔵に任せておきました。すると、夜中に得体の知れない者が忍び込んで、年寄の金蔵を、足腰の立たないほど殴って行ったんです。そんな荒っぽい化物は世の中にあるで

しょうか、親分」

「化物の殴り込みというわけですね」

平次は苦笑しました。

「何しろ金蔵は、六十三という歳ですから、気だけは勝つていても、化物と組討ちをする柄じゃございません。縁側で眼を廻しているのを下女が見つけて、一応の手当てはしましたが、何を訊いても夢のようだと申します」

「雨戸は？」

「一枚はずれておりました」

「化物もさすがに節穴からは通れなかったでしょう」

と平次。

「馬鹿馬鹿しいと思いなながらも、これじゃやりきれません。女房の臆病に付き合おうようですが、親分の知恵でも拝借したらと思ひましてね」

由兵衛は仕様ことなしに笑っております。

「私が行って見るのはワケもありませんが、岡っ引の姿を見ると、鳥が逃げてしまいます。明神様には済まないが、朝詣りということにして、ここへそつと寄って下すつたのは、宜いことでした。

——ところで、お店の奉公人は、幾人位ありましよう」

「金蔵を始め、番頭手代小僧まで十七人、それに下女が三人、飯めし

炊たきが一人」

「多勢ですね。その中で、三月か四月前に来たのはありませんか、化物の悪戯わるさの始まる頃——」

「私もその辺に気がつきましたが、生憎丸あいにく一年勤めているのが、一番の新米で、金蔵などは四十七年もいるそうです。——もつとも、この三月の出代りに暇を取るのや出すのは三人ほどあります
が」

昔の奉公人は三月が出代り、それまであと十日とありません。

「それじゃ、今晚は奉公人のうちで一番気の強いのを、一人だけ離室へ寝かして見て下さい。二朱か一分の褒美を出したら、進ん

で離室の番をしようと言うものがあるでしょう」

「又怪我をされると困りますが——」

「大丈夫ですよ、私も後でそつと覗きますから。——もつともこれは言っちゃいけません」

三

その晩平次は、お勝手口からそつと升屋の母家に忍び込みました。案内してくれたのは主人の由兵衛。子刻過ぎこのつの店中は、さすがに寝静まって、コトリとも音がしません。

「離室へ寝ているのは？」

平次は廊下に立ってささやきます。

「治助——という男で」

「強いんですね」

「平常ふだんは至って弱い男ですよ、——褒美を一両出すが、離室へ

行って寝る者はないかと言うと、誰よりも先に名乗って出ました」

「お店に何年くらいいるでしょう」

「二年くらいになるでしょうか。二十七八の、よく働く男ですよ」

主人の由兵衛はこう言いながら、離室の方へ案内します。真っ

暗な廊下あしさぐを足捜りで、馴れない平次には音を立てまいと思うのが

一と難儀です。

「この三月の出代りに、その男も出されるんでしょう」

「その通りですよ親分。よく働くには働きますが、身元が判然はっきりしないのと、人柄はよいが、仲間の受けがよくないので、三月には帰すことになっております」

「化物が忙しくなったわけですね」

「へエ——」

主人は判らないながら、平次へ相槌あいづちを打っております。

「おや？」

由兵衛は立止りました。雨戸が一枚開いて、縁側には梅の蕾つぼみを

ふくらませる、柔かな風が吹込んでいます。

まだ月は出ませんが、庭には、揺ぐゆら仄明りほのあか。

「シート」

平次は由兵衛の袂を押えました。ここで何か言い出されては、何もかもいけなくなってしまう。

「治助は床の中にいない様子です」

「――」

平次はそれに応えず、黙って外を指しました。

「あッ」

離室の裏、少し荒れた窓寄りの辺あたりを、一生懸命掘り下げている

二人の人影があつたのです。

「黙って」

平次は由兵衛の驚きを押えるのが精一杯でした。

「小さい方が治助です」

「一人は相棒でしょう」

「何を掘る積りでしょう？」

「シッ」

窓の外の二人は掘る手を休めて、腰を伸ばしました。土の上へ、横においた泥棒龕燈どろぼうがんどうの灯は、塀あかりに反射して、覚束なくも二人の顔を照します。

治助というのは、なるほど三十には間があるでしょう。少し華著に見える男ですが、こんなのが案外な強したたか者かも判りません。もう一人は四十前後、凄まじい青髯あおひげで、頬冠りを取って汗を拭いたところを見ると、山賊の小頭が戸惑いして飛込んだ——と言つた男です。

「あとにはもう楽だ。一尺も掘ると、その下は土蔵を壊した時の、壁土や瓦かわらや貫ぬきや木舞こまいが投げ込んであるというから——」

治助の声でした。

「——」

それを聴いた、由兵衛の顔は見物でした。

「何を呆れていなさるんで——、旦那」

平次はこう訊かずにはいられません。

「井戸を埋めたのは六七年前のことですよ。それを新参者の治助が知っているのはおかしいじゃありませんか」

由兵衛の言うのはもっともです。離室の窓の下、何の変化もない踏み固めた場所から、昔の井戸を捜し出すのは、いずれ仔細のあることでしょう。

「縛ってしまいましたしょうか」

平次はこれ以上井戸掘を見ているのが馬鹿馬鹿しいような気がしました。飛出して縛り上げた上、二人の口を開かせ、それか

ら井戸を掘って見ても遅くはありません。

「も少し見ていきましょう。——井戸はどうせ一間とはありません。

二人で掘れば、二刻ふたとぎともかからないでしょう」

「二た刻？」

「何が出て来るか、楽しみじゃありませんか」

側に平次がいるせいもあるでしょう。由兵衛はすっかり落ち着いて、井戸の中から、金の茶釜ちやがまでも出てくるのを見ていた様子です。

四

治助が言った通り、一尺ほどの下は木舞こまいやガラクタが主おもで、何のわけもなく井戸は掘下げられます。

「早くしようぜ。兄哥」

「心得てるよ。夜明けまでに掘り出して、裏木戸からズラかりや宜いだろう」

二人は予かねて用意した道具で、骨身を惜まなず働きました。

由兵衛と平次は、息を殺してその作業を見守りました。丑刻やつが

鳴り、寅刻ななつが鳴ると、治助はさすがに疲れた様子ですが、外から

呼んだ青髯の相棒は、労働には馴れている様子で、ほとんど疲れ

を知らぬ人間のように、根気よく掘りつづけれます。

「変なものがあるぜ、兄哥、灯を見せてくれないか」

井戸の中で、ガラクタを取りのけていた青髯が言うと、

「それよ——」

上から治助が、がんどう 龕燈の灯先を向けてやりました。

「わッ」

「た、大変ッ」

龕燈を差し向けた治助も、井戸の中の青髯も、一ぺんに声をあげます。何様、容易ならぬ物を見たのでしよう。

「兄哥、一人で逃げちゃ殺生だ。——待ってくれ」

「逃げるものか、——そんなものは片づけて、その下を見るが宜い」

「俺はもう御免だ。代るから、こんどは兄哥が入って見てくれ」
青髯はとうとう、たまりかねて井戸からはい出します。

「今更そんな気の弱い事を言っちゃ困るじゃないか。大事な品は多分その下にあるんだろう。ノコノコ這い出して来やがると、無事じゃおかねえよ」

治助の手にはキラリと何やら光ります。多分脅かしのあいくちヒ首でしようが、こうなると、青髯の凄まじい男よりは、華奢な治助の方が、遥かに悪党らしい様子です。

「兄哥、勘弁してくんな。俺はもうイヤだ。——大きな声を出すぜ」

「馬鹿野郎。——仕様のねえ人足だ。今引上げてやるから、待っている」

そう言いながら治助は、闇の中にそつと匕首を構えます。井戸の中から上って来る相棒を一と突きにして、その臆病な口を封じた上、自分で中の秘密を捜る積りでしよう。

がしかし、こうなると平次も放っておけません。由兵衛と顔を見合せると、

パツと飛出しざま、治助の利腕きりきうでを殴りました。

「あッ、何をしやがるッ」

ヒ首を叩き落されて、拾いにかかると、加勢に飛込んだ主人の由兵衛、咄嗟とっさのまに、そのヒ首を蹴飛ばします。

「神妙にせい」

平次の馴れた手は、早くも治助を取って押えましたが、同時に、井戸から飛出した青髯、由兵衛をドンと一突き、疾風の如く裏木戸から飛出すのを、

「どっこい、待っていたぞ」

闇から生れたようなガラッ八の八五郎、一流の糞力くそぢからに、青髯の

後ろから、無手むずと羽搔締むすにしてしまいました。

五

「何だ何だ」

「又化物が暴れ出したのか」

「それ行つて見ろ」

母屋から五六人、心張棒、天秤棒てんびんぼうから、長押ながしの槍まで持出して、

招く骸骨
バラバラと飛んで来ました。夜は明けかけている上に、多勢となると、馬鹿に威勢がよかったです。

「おや、旦那」

「平次親分も」

そこに展開された、ふしぎな事件に、飛出して来た奉公人達も、しばらくは呆気にとられるばかり。

「大急ぎで灯を持って来てくれ」

主人の由兵衛はようやく我かえに還ると、さっそく指図役に廻ります。大立廻りの時龕燈は消えて、薄明るい暁の光りでは、井戸の中までは見えなかつたのです。

「へエ——」

持って来たのは提灯と手燭と、有明の行燈、掘り下げた井戸の

三方からいっぺんに差出されました。

「凄まじい好奇心が、口火を点じた煙硝えんしやうのように燃え上がります。

「あッ」



驚きの声が、多勢の口を衝いて出ました。井戸の底にあるのは、
——さん 燦たる大判小判？——いやそんな生優しいものではありません。
——はじ 黄灰色に濁った、世にも浅ましい人間の死骸だったのです。

「わッ」

番頭達も、主人の由兵衛も、思わず弾はじき飛ばされたように飛び退きました。先刻井戸の中の青髯が悲鳴を挙げて這い出そうとしたのも、全く無理はありません。

「誰か手を貸して貰いたいが」

さすがに平次は一番落着いておりました。一とわたり驚きの納

まるのを見ると、こう言いながら、集った人数の顔を読みます。

「――」

誰も返事をする者はありません。

「八、どうだ」

「やりますよ」

ガラツ八はさすがにいやとは言いません。

はしご

「梯子が一挺、むしろ蕙が一枚、――仏様を乗つけて四隅へ縄を通して

吊り上げるんだから、丈夫なのが宜い」

平次の言葉に勢いを得、番頭達はようやく動き始めます。

井戸から引上げた死体は、想像以上に不気味なものでした。肉にく

漿しようと泥なまこんぶとに、着物は生昆布のように濡れて、縞目も判りませんが、左の胸へは脇差が一本、深々と突っ立って、赤錆あかさびに錆びておりま
す。

肉は殆んど落ちて、乾いた壁や土や木舞こまいの中に埋まっていただ
けに、申分のない曝さらされようですが、その代り、人相の鑑定かんていの付
けようはありません。

「かなり大きな男には違いないが——さて、誰だろう」

平次は四方あたりを見廻しました。恐ろしい沈黙と動乱の世界も、少
しずつ明るくなって、不気味な骸骨の眼が、みんなを睨み据えて
いるようでもあります。

「心当りがあつたら言う方が宜い。こんなにされちや誰だつて浮ばれまい。それ、真つ黒な眼がみんなを見ているじゃないか」

平次はつづけて言いました。

「銭形の親分さん、——この死骸が誰か、私にはよく解ります」
身体の痛いのを我慢して、この時にようやく這出して来た老番頭の金蔵です。

「番頭さんか、お前さんは年頭だ、若しやとしがしらと思う事があつたら言うが宜い」

「若しや——どころじゃございません。これは七年前に行方知れずになられた、先代の大旦那に相違ありません」

老番頭金蔵は言い切りました。

「間違いはあるまいな。番頭さん」

「それはもう、先代の旦那様のお守りをしながら奉公した私で御座います」

「証拠はあるだろうね」

「第一、この胸に刺した脇差は、行方不知しれずになつた時差わきざししているな

すつた品でございます。それから、着物に凝つた方で、——この

古渡唐棧こわたりとうざんは、汚れてはおりますが、よく存じております。それに、

背恰好、左足首に骨まで通つた切瘡——これは若い頃の悪戯わるさの祟

りで、お守の私がうんと叱られました」

「――」

「それに、この井戸を埋めたのは土蔵を建て直した年で、ちょうど七年前、先代の旦那が行方不知しれずになった年でございます。――

浅い井戸で水が悪くて使わずにいたのへ、職人が邪魔な物を投り込むので、与市――これは遠島になった番頭でございますが、その男が言いつけて、とうとう埋めてしまいました」

金蔵の思い出はそれからそれと涯はてしもありません。

「先代の旦那が行方不知しれずになった時、この井戸は見なかったのか

い」

と平次。

「一応は覗きましたが、半分埋まった井戸の底を掘る気にはなりませんでした。何しろ、品川の手から、旦那の脇差の鞘だの、腰こし下だの、下駄だの、いろいろな物が見つかったので——」

「品川の手から身についた品物が上がったのに、七年経ってから、屋敷内の井戸から死骸が出たのはおかしいじゃないか」

「へエ——」

平次の鋭い疑問も、老番頭には何の意味もない言葉でした。

「旦那。どんなものでしょう」

平次はさり気ない顔で由兵衛を見上げました。

「私には何にも解りません」

先刻まで、井戸を掘るのを、あんなに面白がって眺めていた由兵衛の顔は、鉛なまりのように真っ青です。

「先代が行方知れずになった頃、旦那はどこにいました」
「ここにいましたよ」

平次はそれっきり口を緘つぐみました。先代徳五郎の身代を継いだ上、その美しい後家ごけと一年後には一緒になった由兵衛は、罫わなの中に陥おちこ込んだ獣のように、あがきよのない、恐ろしい境遇におかれたことを自覚しないわけには行きませぬ。

川崎へ行ったきり帰らずに、品川の海で死んだことになっておればこそ、その日一日店から動かない由兵衛には、何の疑いも掛

らなかつたのですが、先代徳五郎が、金沢町の自分の家の、庭で殺されたとなると、話がまるつきり違います。

由兵衛が青くなつたのも、頓とみには口も利けないのも、全く無理のないことでした。

六

「親分、何だつて由兵衛を縛らなかつたんで？」

治助と青髯を番所へ引いて行く途中、たまりかねて八五郎は訊きました。

「七年前のことだ。あれだけの証拠じゃ縛れない。——それに、こいつらが井戸を掘っている時、由兵衛は平気な顔をしていたよ。——いや、平気どころじゃない、面白がって眺めていたくらいだ。井戸の中に自分の殺した死骸があると知っていちゃ、どんなに大胆な人間でも、あんな暢気のんきな顔は出来るものじゃない」

「成程ね」

「それに、この二人を縛る時は手を貸して、俺の危ういところを助けたり、灯を番頭の手から取って井戸を覗いたり、——どうしても下手人げしゅにんと思えない事をしている。あの井戸が窓の下にあるのに、離室に平気で五六年も寝起きをしているのもおかしいじやな

いか」

「へエ——。そう言ったものかな」

ガラツ八はまだ腑に落ちない様子ですが、平次にそう言われると、強いて抗さからうほどの知恵もありません。

「安心するが宜い。升屋は万両ぶげん分限で、神田一番の両替屋だ。身に覚えがあつてもなくても、由兵衛は逃げも隠れもすまい。——その上、あれだけの女房があつちや」

「好い女ですね、親分。元は芸者だと言うが」

「左手の小指が半分から先ないだろう。——柳橋から出ている頃、起誓きしようがわ代りに切つたのさ。一生懸命隠してはいるが——」

「へッ、へッ、お安くねえ内儀だ」
かみさん

ガラッハはペロリと舌を出しました。

番所へ行くと、事件があまり変っているのと、升屋の家格が大おほ袈裟げさなので、奉行所へ出かける前、与力の笹野新三郎が見廻つて来ておりました。

「平次、大変な事があつたそうだな」

「お早う御座います。——全く大変なことで、あつしも途方に暮れました。死体が見つかったんですから、下手人を捜さがさなきやありませんが、何分七年も前の事じゃ——」

「まア、諦めたもんじゃあるまい。その井戸掘りをやった、二人

を調べて見よう」

「それよりほかに工夫も御座いません」

「当って見るが宜い」

笹野新三郎は、鷹揚に頷いて上がりかまち框に腰をおろしました。

「手前達は、何だつてあんな仏様を掘り出したんだ。お上には御慈悲がある、手数を掛けずに言つてしまつたらどうだ」

八五郎に縄尻を掴ませて、平次は二人の前へ立ちました。町奉行の御白洲は型ばかりで、下調べは大抵うちこうして埒を明けたのです。

招く骸骨

「金があると思ひましたよ。——何しろ小判で三千両と言うから

「青髯の男は、思いのほか軽口で、ペラペラとやります。」

「黙っている」

「治助はジロリと凄^{さんぼくが}い三白眼を見せました。」

「兄^{あにき}哥、こうなつちや言つた方がいいぜ。三月越しお化けの真似をした上、ちよいと井戸掘りをやらかしたほかに、大した悪事もしなかつたじゃないか」

「青髯は他愛もありません。」

「言つて宜きや、俺が言うよ。」

「それは良い料見だ。なア治助、島帰りはそれ位の度胸がなきや

ア、悪党仲間へ顔向けがなるめえ」

「へッへッ、よく御存じで、銭形の親分」

「額の入墨を、刃物で切り取つてあるじゃないか。子供の時庭で転んで、切石に額を打つつけた——とでも言うんだらう」

「成程ね。親分は見透しだ。みんな器用にブチまけましょう」

治助はすっかり諦めた様子で、ボツボツ語り始めました。

「打たれたり叩かれたりして、口を割るあつしじゃねえが、笹野の旦那と銭形の親分が揃っちゃ、重忠様が二人だ。不貞腐れるだふてくさけが野暮でしょうよ。——なにを隠しましょう、あつしはお小姓

「何？ お小姓の治郎助？ それが手代に化けて、二年も我慢したのか」

平次が驚いたのも無理はありません。お小姓の治郎助というのは、武家の出だとも、役者崩れだとも言われる、名題の悪党で、海道筋を縄張に、宿から宿と荒し廻る忍しのびの名人だったのです。

「だらしのねえ恰好で、お目通りをして、面目次第もありません。——お小姓の治郎助が、井戸掘りの真似をしたんだから、笑ってやって下さい。実は親分」

「——」

お小姓の治郎助の白状は怪奇を極めました。駿府で捕って、三

宅島へ流されたのは四年前、そこで端なくも、五年前に贋金使いで島へ流された、元の升屋の番頭、与市と懇意になったのが、そもそもこの事件の発端ほったんでした。

それから一年ばかり経って、与市は、傷寒しょうかんで死にましたが、臨終という時治郎助を枕辺に呼んで、

——江戸へ行ったら、金沢町の升屋へ入り込んで、離室の窓の前にある、古井戸を掘って見るが宜い。一間ばかり掘ると小判で三千両の金が出て来る筈だ。——それは新鑄しんちゅうの通用金と、旧鑄の金を換える時、そつと用意した贋金と摺り換え、真物の小判を三千両も貯めて、井戸の底に隠したのだ。俺は

もう助かる見込みはない、これを言わないと心残りがして、
よみじ冥土の障りになる。形見にやるから、掘出して遣つてくれ――
 。

と、こう言つたのです。

「島から許されて帰ると、大金を掛けて手蔓てづるを拵え、二年前に升屋へ入り込んだが、どうしても井戸を掘る隙がねえ。そのうちに素性がバレそうになって、この三月にはお払箱と決つたから、大急ぎでこの青髯の竹の野郎を仲間に入れ、化物騒さわぎをして離室を明けさせようと企らんだが、主人の由兵衛は確り者で、少しも怖がらねえ。――昨夜はようやく井戸を掘つて、大願成就じょうじゆと思う

とこの始末だ。銭形の親分、面目次第もないが、これが掛値のねえ白状だ。お小姓の治郎助も、あれほど馬鹿にされようとは思わなかつたよ」

少し不貞腐れますが、この言葉に嘘があるとは思われません。笹野新三郎と銭形の平次は、何とはなしに顔を見合せました。

「平次、井戸の中には、確かに金はなかつたろうな」

と笹野新三郎。

「それはもう間違いは御座いません」

「すると、島で死んだ与市とか言う番頭が、治郎助を使って、井戸を掘らせたのは？」

「死体を掘り出させるために御座いましょう」

「何のためだ」

「かたき讐を討つためでございます。升屋の先代を殺した下手人に

怨みがあつて、それに思い知らせるために——」

平次の明察は次第に蘇よみがえります。

「そんな手数な事をするより、——井戸の中に死体がある。下手人は誰——と言つてしまつた方がよいではないか」

「死体があると言つちや、治郎助が骨を折つて出してくれません。

——それに、島でそんな事を言つたところで、贖金使いの兇状持の言うのを誰が真に受けましょう」

「成程、そんな事もあるだろう。——与市が怨んでいる者と言うと——」

「与市は金蔵に次いで店中の幅利きで、内々升屋の身上しんしやうを覗つていた上、主人あるじの女房のお蔭つたにも気があつたそうです」

「すると？」

疑いは又もや、当主由兵衛の方へ、北を指す磁石じしやくのように、極めて自然に、宿命的に向いて行きます。

「だから親分、あの時由兵衛を縛つたら——つて言つたじゃありませんか」

八五郎は齒痒そうでした。

「手前てめえは黙っている」

平次は何時もに似気なく不機嫌です。

七

その日の夕方、ガラツ八は鉄砲玉のように飛んで来ました。

「親分、大変だ」

「何が大変なんだ。こんどは井戸から幽霊でも出たのかい」

平次は瞑想から呼び覚まされて、この日本一のあわて者を迎えました。

「三輪の万七親分が乗出したんで」

「それがどうした」

「驚いちゃいけませんよ。親分、内儀のお蔭を縛って行きました
ぜ」

「何だと、馬鹿野郎」

平次はガラツ八を叱り飛ばしているのです。

「お蔭を縛ったのは、あつしじゃありませんぜ。三輪の万七とお
神楽かぐらの清吉で——」

「あの女が元の亭主を殺したと言うのか」

「何だか知らねえが、骸骨にゆうかんを入棺しようとする、されこうべの

口から、噛み切った小指の骨がポロリと落ちたんで——」

「あッ」

「驚くでしょう親分。——内儀の左の手には小指がねえ、——ちよ
うど親分のアラ捜しにやって来た万七親分は、それを聴くと直ぐ
内儀に縄を打った」

「よしッ、そんな馬鹿な事があるものか。もう一度行こう」

平次はガラッ八を追っ立てるように、升屋へ飛んで行きました。
升屋の中は恐ろしい事件の続発に怯えて、滅入めいったような陰惨

さ。

「死骸の口から出た小指というのはここにあるだろうね」

平次は挨拶も忘れて、主人の由兵衛に訊ねました。

「これですよ、親分」

指したのは、きょうづくえ経机の上の小さい箱に入れたかみづつみ紙包、——心忙し

くひろげて見ると、

「何だ。こりゃ女の小指じゃねえ」

平次は少し拍子抜けがした様子です。

「私もそう思いました。それに、蔦が指を切ったのは、柳橋にいる頃で、もう十年も前のことです。三輪の親分にそう言っても、耳に入れてくれません」

由兵衛は平次の言葉に勢いを得て、急にこんな事を言うのです。

「心配なさることはありませんよ。お内儀さんは直ぐ返されるでしょう。——が、他にこの家に、指のない人はありませんか」

平次はその辺に寄って来る番頭達を眺めました。

「私はこの通りですが——」

由兵衛は十本満足に揃った、自分の指を見せながら続けました。

「ね、金蔵どん、——三宅島へ流された与市は？」

「左様でございます。私もそれを申し上げようと思っております。

与市は先代の旦那様が行方不知しれずになった頃、療瘡ひょうそをやったとか

言つて、外科で指を切ったように思いますが」

「そんな事があつたね」

と由兵衛。

「どの指でしよう？」

「右手の薬指でしたよ。——書き物に不自由はないが、箸はしを持つには困るとか言っておりますから」

「与市は左利きでしたか」

「そんな事はありませんよ」

金蔵の記憶はたしかでした。

「念のため、もういちど治郎助と竹に逢って、与市の様子を聴い

て来ましょう。右手の薬指というと少し話が変わってくる——旦那

骨骸く招く

は番頭さん達と、御通夜おつやをして待っていて下さい。帰りにはお内

儀さんも一緒かもわかりませんから」

平次は八丁堀へ飛びました。由兵徳と金蔵だけでなく、島で与市に逢った、治郎助からも指の事を確かめておきたかったのです。

「親分。あの指が与市のじゃ、無駄骨折りじゃありませんか」

「――」

「下手人が島で死んで、からかい面に死骸を掘らせたんでしょう」
ガラッ八は平次のうしろから、こんな事を言います。

「黙っている。筋はこれから面白くなるんだ」

「へエ――」

八

平次が八丁堀から升屋へ帰ったのは、その晩の丑刻やっ過ぎでした。昨夜も一睡もしないのに、大した疲れた様子もなく、手掛けた事件を、一気に片づけようとするのでしよう。

お蔭は手続きが遅れて、今晚連れて来るわけには行かなかつた
そうですが、——

「その代り、素晴らしい事を聞込みましたよ」

平次はこう言いながら、少し有頂天に手を揉んでおります。

「どんな話です。親分」

と由兵衛。

「治郎助が言うんです——与市は苦しい息の下から、——井戸の中には升屋が引くり返るような物があるが、あんまり吃驚びっくりしてぞんざいに見るな。その品の下には、もう一つ、人一人の命かかに関わる品があるぞ。大事な大事な証拠だ。そいつを忘れるな。あん畜生に思い知らせる品だ——ってこう言ったんだそうですよ」

「——」

骸骨招く

「升屋が引くり返るような品というのは、この棺に納めた先代主人の骨に決っています、——人一人の命に関わる大事の品、あん畜生に思い知らせる証拠の品——と言うのは、いったい何で

しょう」

「――」

「多分、下手人の落した、煙草入とか紙入のようなものでしょう。どうせ夜じゃ判るまいから、明日の朝捜すことにして、それまで私は、家へ帰ってひと寝入りして来ます。さようなら、お休みなさいまし」

平次は一人言のように言って、升屋から飄然と立去りました。

ひようぜん

九

それから一刻ばかり後。

升屋の店中はすっかり寝静まつて、先代主人あるじの骸骨を納めた、離室の一室だけが明々と灯ともつておりました。

平次が帰ると間もなく、雇人達はみんな下がって、残ったのは元気を恢復した老番頭の金蔵一人、これも薄寒いのと淋しいので、夥おびただしい徳利を並べた後は、他愛もなく眠りこけて、庭先にどんな事が起っているかも知りません。

フト黒い影が、離室の雨戸を離れると、掘荒した井戸の方へ、静かに近づいているのです。

招く骸骨

時々足下あしもとの大地を丸く照すのは、ゆうべ治郎助達が持っていた、

どろぼうがんどろ
泥棒龕燈でしよう。

黒い影がようやく穴の口に近づくと、要心深くしゃが踞んで、泥棒龕燈を古井戸の底へ差向けました。

「あッ」

黒い影はのけ反らんばかりに驚きました。がしばらくすると、気を取直した様子で、もういちど井戸の底を覗いたのです。

中には、ゆうべ見た通り、——濡れ腐った着物に包まれた、凄まじい骸骨が一体、寒々と横たわっているではありませんか。

「——」

招く骸骨

黒い影は全身をふる顫わせて、バリバリと齒を噛み合せました。凄

まじい恐怖を我慢している様子です。

「由兵衛」

どこからともなく、か細い不気味な声。

「馬鹿な」

黒い影は超人的な勇気を振り起して、もういちど井戸の中を覗きました。こうして自分の妄想もうそらを取払おうとしたのでしよう。が、

底に横たわった骸骨はそのまま元の姿で、何の変りもなく、――

いや、何の変りもなければ、黒い影は勇気と理性を取戻す道も

あったでしょうが、このとき骸骨は、黄灰色こうかいしよくに曝れた手さを挙げて、

ユラユラと井戸の上から覗く黒い影を招いたのです。

「由兵衛——来いよ」

黒い影は、その声を聞くと見事に引っくり返りました。

「わーッ、勘弁してくれ。——私が悪かった」

這い廻る黒い影の上へ、

「御用ッ」

いつの間にやら平次の手はかけられていたのです。

「親分、もう上がっても宜うがすかい」

井戸の中からはガラッ八の八五郎。骸骨の紙型を貼りつけた黒い巾きれを脱いで、ノソリと上がって来ました。

「八、御苦労だったな。お蔭で下手人が捕まったよ」

「いや驚いたの驚かねえの」

ガラツ八はペツペツと唾つばきを吐きながら、身体に巻きつけた、異様な装束しょうぞくを脱いでおります。

×

×

下手人は言う迄もなく由兵衛。

「指を噛み切られたのは与市なのに、下手人が外にあったのはどう言うわけでしょう」

翌る朝、疲れが少し脱けると、ガラツ八はもう絵解きをせがみます。

「先代の徳五郎を殺したのは、由兵衛と与市と相談の上だ。由兵

衛は升屋の身代を継ぎ、与市はお蔭つたを手に入れる積りだったが、由兵衛に両方とも取られた上、贖金にせがねの一件がばれて島へ送られた。その時与市が主人殺しの事を言わなかったのは、贖金の方は確かな証拠がなかったそうだから、島で神妙に勤めさえすれば、許されて江戸へ帰る見込みもあるが、主殺しは間違いもなく磔刑はりつけだ。知らん顔で納まっている由兵衛が癪にさわるが、これだけは与市も白状する気がなかった」

「成程ね」

「で、死ぬ時、治郎助を騙だましたのは、由兵衛への嫌がらせで、うまく行けば叔父分殺しという重罪を露見さしてやろうと企らん

だのだ」

「――」

「七年前のその晩、主人の徳五郎が川崎から夜になって帰って来たのを、庭で刺殺さしころした時、与市は手で口を塞いで噛みつかれたのだろう。――ところが、噛み切られたのは右手の薬指だ。右手の指を噛み切られながら、脇差で相手の胸を刺せるかい。――口を塞ぐのと胸を刺すのと一緒でなければ、徳五郎は大きな声を出した筈だ。この騒さわぎを誰も知らなかったところを見ると、下手人は二人に決っている」

「――」

ガラツ八は唸ります。

「口を塞いだのは与市だが、刺した人間は外にある。身代とお蔭を手に入れた由兵衛に疑いはかかるが証拠は一つもない。そこで井戸の中に証拠の品があると言って、由兵衛をおびき出し、古傷ふるきずを洗って白状させたのさ。いやな術てだが、七年も経っちゃ、こうでもするより外に工夫はない」

平次は憂鬱そうでした。

「今晚まで由兵衛が下手人と判らなかつたんですか、親分ほどの人にも」

「由兵衛はこの古井戸に自分が殺した徳五郎の死体があるとは

知らなかつた。——多分、金を貰つて死体を海へ捨てるように頼まれた与市が、不精ぶしようを極めて、徳五郎の身に着けた品だけ海に流し、死骸は由兵衛にも知らさずに、古井戸へ投り込んで、その上から壁土や雑物を投げ込んだらう」

「——」

「由兵衛があんまり平気なんで、少しも疑う気は起らなかつたよ。——知らぬが仏さ。もしあの古井戸に自分の殺した死骸があると知ったら、六年の間平気で離室に住んだり、治郎助が井戸を掘るのを面白がって見たりはしなかつたらう」

「成程ね」

「企たくらんだ事はどんなに上手に隠しても判るが、知らずに暢気に振舞う人間は疑いようがない。——何しろ嫌な事だったよ」

平次は手柄顔もせず、つくづくこう言うのでした。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

招く骸骨

初出―「オール讀物」昭和十一年三月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第三卷
河出書房
昭和三十一年六月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>